

第61回ヴェネチア・ビエンナーレ日本館、会期後半のプログラム詳細発表 隣接する韓国館との史上初の公式連携：両館を往復する参加型オペラなど

国際交流基金（JF）は、第61回ヴェネチア・ビエンナーレ国際美術展日本館（代表作家：荒川ナツシュ医、共同キュレーター：高橋瑞木、堀川理沙）において、会期後半に実施される関連プログラムの詳細を発表いたします。

このたび、日本館と韓国館とを往復・回遊する参加型ヴォーカル・パフォーマンス「オペラ『草の赤ちゃん、月の赤ちゃん』 MORE THAN MUSICAL with 荒川ナツシュ医」の詳細が決定いたしました。開幕後の反響及び、史上初の韓国館との公式連携の経緯も含めて、以下のとおりご案内します。



『オペラ「月の赤ちゃん、草の赤ちゃん」 MORE THAN MUSICAL with 荒川ナツシュ医』のイメージドローイング、Courtesy of Ei Arakawa-Nash

2026年5月9日に開幕した日本館展示「草の赤ちゃん、月の赤ちゃん」は、国内外の美術メディアや新聞において、**今会期の注目すべきパビリオン**として紹介されています。

国内では、『Harper's BAZAAR art』『ARTnews JAPAN』において展示に至る背景が詳しく紹介されたほか、『美術手帖』『Tokyo Art Beat』による開催直後の日本館を特集した詳細な現地レポートが掲載されました。海外では、『ArtAsiaPacific』『Artforum』『ARTnews』『ArtReview』『Flash Art』『Frieze』『The Art Newspaper』といった美術メディアで取り上げられたほか、『The New York Times』による「Top 7 Buzzing Pavilions」への選出をはじめ、『Corriere della Sera』『The Guardian』『South China Morning Post』など各国の新聞でも紹介されています。

この件に関するお問い合わせ： 国際交流基金 広報部（広報担当：熊倉、福島）

Tel: 03-5369-6075 / Fax: 03-5369-6044 E-mail: press@jpf.go.jp

本展は、2024年に双子の親となったクィア・アーティストの荒川ナッシュ医の育児体験から生まれた展示です。アメリカでアジア系ディアスポラとして生活する作家自身のアイデンティティや、母国の歴史への省察を起点に、来館者が未来の象徴である赤ちゃんを育成する「ケア」の営みを通じて、彼らが将来生きる世界のあり方を問いかける空間へと日本館を姿容させています。

作品の出発点となる1階ピロティエリアで来館者に手渡される57体の赤ちゃん人形には、荒川ナッシュが自身の子供たちに伝えたい20世紀の歴史的な日付が「誕生日」として授けられています。本展には、分野や国境、さらには時代や世代を超えた様々な表現者が参加しており、来館者は赤ちゃん人形をケアしながらこれらの作品を巡り、最後におむつを替えることで、占星術師でライターの石井ゆかりが誕生日に合わせて執筆した「オムツの詩」を受け取ります。一連のケア行為を通じて、「私たちは過去とどのように向き合い、その先にある新しい命をどう祝福できるのか。」という、世代を超えて受け継がれる責任と希望の問いに直面することとなります。



上：荒川ナッシュ医「草の赤ちゃん、月の赤ちゃん」展示風景（2026年）
下：FAC XTRA RETREATによるパフォーマンス《24 アワー・ケア》
撮影：Uli Holz, Courtesy of the artists, 提供：国際交流基金



韓国館との史上初の公式連携：日韓両館の境界を越えて行き来する チェ・ゴウンの作品《Corea Pavillion-Bush-Giappone Pavillion》2026
撮影：Uli Holz, 提供：国際交流基金



韓国館との合同祝杯の様子（2026年5月6日 日本館／韓国館オープニング・レセプション）
撮影：丸尾隆一、提供：国際交流基金

この57の日付に込められた文脈は、隣接する韓国館（代表作家：チェ・ゴウン、ノ・ヘリ、キュレーター：チェ・ビンナ）にも接続されており、本展における重要な試みの一つである「日本館史上初となるパビリオン間の公式連携」へと繋がっています。この連携は、両館のアーティストやキュレーターが長年築いてきた親交と深い対話、信頼関係を背景に韓国文化芸術委員会（ARKO）との公式な連携のもと実現いたしました。

韓国館の屋根には、歴史の重要な契機となった日の誕生日をもつ赤ちゃん人形が、その背景に関連したポーズで設置されているほか、定期的に行われているノ・ヘリのパフォーマンス《Bearing》に日本館の赤ちゃん人形が参加しています。さらに、両パビリオンの境界に位置する生垣には、チェ・ゴウンによる銅パイプを用いた彫刻作品《Corea Pavilion-Bush-Giappone Pavilion》が敷地を貫通するかたちで設置されています。

また、5月6日に開催したオープングレセプションでは、シンガー・ソングライターのイ・ランのリードによる《Our ㅁ (mieum)》* の歌唱に合わせ、日本館チームおよび観客が韓国館前へと移動し、韓国館チームとの祝杯を交わしました。

*オープングレセプションで歌われたイ・ランによる《Our ㅁ (mieum)》については、韓国館の公式ウェブサイト内にある以下の特設ページにて、歌詞の閲覧および音源の試聴が可能です。（公式ウェブサイト：<https://www.korean-pavilion.or.kr/reader/our-mieum/>）

こうしたパビリオン間の対話と協働の流れは、会期後半にはさらなる展開を見せます。その一環として開催される「オペラ『草の赤ちゃん、月の赤ちゃん』 MORE THAN MUSICAL with 荒川ナツシュ医」の詳細につきましては、下記のとおりです。

記

■「オペラ『草の赤ちゃん、月の赤ちゃん』 MORE THAN MUSICAL with 荒川ナツシュ医」詳細

伝統的なパビリオンの枠組みを越え、観客自身の「声」で世界を紡ぎ出す体験型ヴォーカルアート。日本館を起点に韓国館へと回遊する、これまでにない参加型ヴォーカル・パフォーマンスです。

タイトル：オペラ「月の赤ちゃん、草の赤ちゃん」 MORE THAN MUSICAL with 荒川ナツシュ医

日時：8月30日（日） 11:30（1回目） / 16:00（2回目） / 17:00（3回目）

9月1日（火） 11:30（1回目） / 16:00（2回目） / 17:00（3回目）

9月2日（水） 11:30（1回目） / 16:00（2回目） / 17:00（3回目）

会場：第61回ヴェネチア・ビエンナーレ国際美術展 日本館～韓国館（回遊型）

出演：平野和（バス・バリトン）、アリエル・ユヒョン・ジョン（ソプラノ）

参加方法：申し込み不要（※ビエンナーレの入場券をお持ちの方は、別途チケットは必要ありません）

主催：第61回ヴェネチア・ビエンナーレ国際美術展日本館イベント実行委員会 [荒川ナツシュ医、高橋瑞木、堀川理沙、石井孝之、増山貴之]

共催：MORE THAN MUSICAL、タカ・イシイギャラリー、国際交流基金

概要：テーマは「人間が歌えるようになる過程＝社会の生成」。観客は「声の起源」である日本館で赤ちゃんの原初的な音や呼吸を聴き、自らも意味のない声を発して応答します。続く「社会化」の空間である韓国館へ移動するなかで、観客同士の声は真似し合い、重なり、やがてプロのオペラ歌手がそれらを一々の楽器を使わずに一つの美しい音楽（社会の構造）へと昇華させていきます。**見どころは、歴史あるビエンナーレの国家間 silo（分断）を融解させる「回遊」という演出、そして観客を受動的な鑑賞者から「共作者」へと転換させる MORE THAN MUSICAL ならではの圧倒的な没入（イマーシブ）体験**です。演出に田尾下哲を迎え、他者の声に耳を傾け応答する「ケア」のプロセスを通じて、私たちがどのような未来（世界）を創るのかを、音と身体を通じて強く問いかけます。

この件に関するお問い合わせ： 国際交流基金 広報部（広報担当：熊倉、福島）

Tel: 03-5369-6075 / Fax: 03-5369-6044 E-mail: press@jpf.go.jp

なお、本企画は、日本館展示における初の試みとなるクラウドファンディング「日本館でパフォーマンスしよう」コースへのご支援により実現しました。

(クラウドファンディング特設サイト：<https://congrant.com/project/artnest/19915>)

MORE THAN MUSICAL とは：2016年に香港で創設、2025年より日本へも活動の拠点を拡張した先駆的なオペラ（ヴォーカルアート）カンパニー。伝統的なオペラの形式的境界を再考し、「音・身体・空間・観客・記憶」の相互関係を再編成する実践を続けています。

同カンパニーの核（コア）にあるのは、観客を受動的な鑑賞者から表現の「共作者（Co-creator）」へと転換するイマーシブ・オペラです。九段ハウスや京都・大原山荘といった歴史的建造物での『椿姫』、渋谷・金王八幡宮での『歌舞伎×パリアッチ』の交差から、さらには2025年ジーコオールスターゲーム「HIROSHIMA」や2026年Jリーグ開幕戦をはじめとする、従来の劇場の枠組みを超えた数万人規模のスタジアム公演まで、場所の持つ固有の記憶や公共性と深く結びついたサイト・スペシフィックな舞台を展開。数万人の観衆を巻き込み、オペラを集合的かつ現代的な体験として提示してきました。

オペラを固定された古典ジャンルではなく、絶えず変容し生成し続けるプロセスとして定義し直し、その規模（スケール）と観客との関係性を根本から刷新しながら、グローバルに発信しています。

(MORE THAN MUSICAL 公式 Web サイト：www.mtmjapan.org / www.morethanmusical.org)

・プロデューサー 長谷川留美子

・演出 田尾下哲

1972年兵庫生まれ、横浜育ち。第20回五島記念文化賞オペラ新人賞受賞。

ミハエル・ハンペに西洋演劇、演出を学び、オラディーポ・アグボルアジェに劇作の指導を受けている。

近年の演出作はMORE THAN MUSICAL『Kabuki x パリアッチ』大宮ソニック『平家物語』、日生劇場『ルチア』、LDH『インタビュー』、関テレ『ドロシー』、『ガリレオ』、歌舞伎『雪蛭恋乃滝』などがある。

今後もオペラ、ミュージカル、芝居の演出の他、海外での劇作が控えている。

・プロジェクトマネージャー 深町達

・出演者プロフィール

平野和（バス・バリトン）

日大芸術学部、ウィーン国立音大修士課程を首席修了。グラーツ歌劇場デビュー後、ウィーン・フォルクスオーパー専属歌手を14年間務める。ウィーン楽友協会、ベルリン・フィルハーモニー、ザルツブルグ音楽祭等へ出演。25/26シーズンはフォルクスオーパー『魔笛』、バッハ・コレギウム・ジャパン上海公演に出演の他、独・コトブス州立劇場『ナブッコ』ザッカリア役でロールデビューし高評された。Xアカウント @ YasushiHirano



©武藤章

アリエル・ユヒョン・ジョン（ソプラノ）

ウィーン国立音楽大学学士・修士課程を最優秀成績で修了。アン・デア・ウィーン劇場をはじめ各地の歌劇場で活躍し、『イドメネオ』イーリア、『ラ・ボエーム』ミミ、『魔笛』パミーナ、『ドン・ジョヴァンニ』ドンナ・エルヴィーラなどを演じる。ウィーン・コンツェルトハウスではソプラノ・ソリストとしてデビュー。マーラー『交響曲第8番』のマーテル・グロリオーサも務めた。シューベルト国際コンクール・グランプリほか受賞多数。

この件に関するお問い合わせ： 国際交流基金 広報部（広報担当：熊倉、福島）

Tel: 03-5369-6075 / Fax: 03-5369-6044 E-mail: press@jpf.go.jp

■ そのほか関連プログラム

・ 11月20日(金) 荒川ナッシュ医による子どもツアー2

ヴェネチア在住の子どもたちを対象に、未来の象徴である赤ちゃん人形をケアしながら会場を巡る、作家自身による特別なキッズツアー。

・ 11月20日(金) 夜のサウンドリスニングイベント「雲の赤ちゃん、夜の赤ちゃん」

サージ・チェレブニンによる本展のための8チャンネルサウンドアートを、日没後にリスニングするイベント。

・ 11月22日(日) パフォーマンス：荒川ナッシュ医 + End of Fall

ACCJ(AIT)による今回の日本館のカーボンフットプリントのリサーチからインスピレーションされた荒川ナッシュによるクロージングパフォーマンス。

■ メディア掲載例

ArtReview 2026/05/01 [The Interview: Ei Arakawa-Nash](#)

ArtAisaPacific 2026/05/04 [Must-See National Pavilions at the 61st Venice Biennale](#)

The Art Newspaper 2026/05/06 [Our pick of the best pavilions at the 61st Venice Biennale](#)

Frieze 2026/05/06 [National Pavilions Review: Porta-Potties, Porn and a Defiant Rave](#)

ARTnews Japan 2026/05/07 [日本館で「異質なわたし」を引き受ける——荒川ナッシュ医インタビュー](#)

ARTnews 2026/05/07 [Drained, Drowning, and Decay: The Best National Pavilions at the Venice Biennale](#)

Flash Art 2026/05/08 [“In Minor Keys” 61st Venice Biennale](#)

The New York Times 2026/05/08 [7 Pavilions That Have the Venice Biennale Buzzing](#)

美術手帖 2026/05/08 [ヴェネチア・ビエンナーレが開幕。日本館で荒川ナッシュ医が「赤ちゃん」を通して問いかけるケアと未来](#)

BAZAAR art 2026/05/12 [日本館代表アーティスト、荒川ナッシュ医インタビュー「草の赤ちゃん、月の赤ちゃん」に込める思い（『Harper's BAZAAR art no.5』4月20日発売号の転載）](#)

The Guardian 2026/05/14 [Naked jetskiers, human bells and a celebrity seagull! Venice Biennale's wildest moments – in pictures](#)

Artforum 2026/05/14 [Looking for Depth in Venice](#)

Corriere della Sera 2026/05/15 [Una nuova tecnologia \(e noi\)](#)

Tokyo Art Beat 2026/05/15 [「第61回ヴェネチア・ビエンナーレ」日本館、荒川ナッシュ医「草の赤ちゃん、月の赤ちゃん」レポート。200体の赤ちゃん人形が宿すケアと歴史の重み](#)

South China Morning Post 2026/05/20 [How Asian artists at the 2026 Venice Biennale are making their voices heard](#)

以上

■ 第61回ヴェネチア・ビエンナーレ国際美術展 日本館 <https://venezia-biennale-japan.jp/j/>

会期：2026年5月9日（土）～11月22日（日）

会場：日本館（ビエンナーレ会場 ジャルディーニ地区内）

出品作家：荒川ナツシュ医

共同キュレーター：高橋瑞木（CHAT 香港紡織文化芸術館、館長／チーフ・キュレーター）、堀川理沙（シンガポール国立美術館、シニア・キュレーター／キュレトリアル&コレクション部門部長）

主催／コミッショナー：国際交流基金

特別助成：公益財団法人石橋財団

以下の作家による作品や協力を含む：R・キクオ・ジョンソン（イラストレーター）、イサムノグチ、石井ゆかり（ライター）、伊住禮次朗（茶道家、茶釜歴史研究家）、韓国館 2026（代表作家：チェ・ゴウン、ノ・ヘリ、キュレーター：チェ・ビンナ）、斎藤玲児、サージ・チェレプニン（作曲家）、崔在銀／チェ・ジェウン（アーティスト）、中村佑子（作家、映像作家）と佐伯英子（社会学者）、FAC XTRA RETREAT（荒川ナツシュ医、パティ・チャン、パール・C・シーウン、アマンダ・ロス＝ホ、アナ・スー・ホイ、シャーリー・セ、エイミー・ヤオ）、MORE THAN MUSICAL

その他の協力およびパートナーシップ：荒川美和子と友人たち in 福島（ベビー服縫製）、アート・クライメイト・コレクティヴ・ジャパン（NPO 法人アーツイニシアティヴトウキョウ）、カ・フォスカリ大学アジア・北アフリカ研究学科（DSAAM）、End of Summer、ペマーキ（建築設計事務所）、森大志郎（グラフィックデザイナー）と小池俊起（グラフィックデザイナー）、NUNO（テキスタイルデザインスタジオ）

※各人の略歴や展示詳細については、2026年3月19日のプレスリリースをご参照ください。

国際交流基金-【取材のお願い】第61回ヴェネチア・ビエンナーレ国際美術展日本館（2026）荒川ナツシュ医「草の赤ちゃん、月の赤ちゃん」ロゴ、展示詳細が決定

■ 帰国展について

会期：2027年6月19日（土）～9月20日（月祝）

会場：アーティゾン美術館 6階展示室

主催：公益財団法人石橋財団アーティゾン美術館、国際交流基金（JF）

アーティゾン美術館 <http://www.artizon.museum>

■ コミッショナーについて

独立行政法人国際交流基金（JF）は、世界の全地域において、総合的に国際文化交流事業を実施する日本で唯一の専門機関です。1972年に外務省所管の特殊法人として設立され、2003年10月1日に独立行政法人となりました。海外に25か国・26の拠点を持ち、「日本の友人をふやし、世界との絆を広くむ」をミッションに掲げ、世界の人々と日本の人々の間でお互いの理解を深めるため、さまざまな企画や情報提供を通じて人と人との交流をつくりだしています。1976年よりヴェネチア・ビエンナーレ日本館展示の主催者／コミッショナーを務めています。

■ ヴェネチア・ビエンナーレ (La Biennale di Venezia) について

ヴェネチア・ビエンナーレは、イタリアの島都市ヴェネチアの市内各所を会場とする芸術の祭典です。1895年に最初の美術展が開かれて以来、130年以上の歴史を刻んでいます。近年、世界各地で美術を中心に、国際的な芸術祭が開催されるようになってきていますが、ヴェネチア・ビエンナーレはそれらのモデル・ケースとなった最も著名な存在です。「ビエンナーレ」とは「2年に一度」意味するイタリア語で、同様な芸術祭の多くが「ビエンナーレ」や「トリエンナーレ」（3年に一度）と命名されているのは、ヴェネチア・ビエンナーレに範をとったものとされています。現在、美術展、建築展、音楽祭、映画祭、演劇祭などを独立部門として抱えるようになりましたが、なかでも美術展は、現代の美術の動向を俯瞰できる場として、また国別参加方式を採る数少ない国際展として世界の美術界の注目を集めています。日本は1952年に初めて公式参加を果たし、1956年に日本館の完成を経て、今日に至るまで毎回参加を続けています。1976年からはJFが日本館展示を主催し、現在に至ります。日本館の過去の代表作家については日本館公式ウェブサイトをご覧ください。 <https://venezia-biennale-japan.jp>

【第61回ヴェネチア・ビエンナーレ国際美術展日本館に関するお問い合わせ】

国際美術展日本館 国内メディア広報担当：有田、津田（arita@earlypress.info）

プレスキット：https://drive.google.com/drive/folders/1zEV26R7nMJ_sWDHSV-dqtCtAMEE9YwMj?usp=sharing

海外メディア広報：press@jpf.go.jp / venezia_art@jpf.go.jp

■ 参考資料

・ 荒川ナッシュ医の手書きメッセージ（日本館で来館者を迎える、日本館 1 階ピロティの壁面に掲示）

【現地到手書きされた英文】

Dear visitors,

This is Ei. This pavilion exists like a stage shaped like a small mountain, where you can participate by carrying a baby doll with you. It is also your choice to experience the exhibition without carrying a doll. You cannot select your favorite doll, but the staff will pass you one random doll that weighs 5 to 6 kg. You can also change their diaper upstairs, in exchange for a poem. Please return the doll before you leave the pavilion.

As a queer person, I never thought I would have children. I feel pressured to be a “good” queer parent, and I took this Biennale job to promote a much-needed discussion on surrogacy and egg donation in Japan. This participatory performance refers to the care labor historically shouldered by women. Your choice to carry a doll also communicates not only our love and enthusiasm, but also our ambivalence about having, or not having, a child—something that should be discussed in a safe space.

Please read the dates near the entrance. As a child, I learned that Japan was the only country to experience the atomic bomb. I also think it is important to face the details of Japan’s ultra-nationalist past. I wanted to pass this history on to my children as a lesson, because I have made some embarrassing mistakes in the past.

I didn’t know Koyo, but as soon as I started to look for minor keys around Japan, the list began to grow quickly. I have only 57 dates here, but I will continue finding more.

【和訳】

ヴェネチアの来場者のみなさん

荒川ナッシュ医です。このパビリオンはまるで小さな山のようなステージです。あなたは赤ちゃん人形を抱っこしながら作品に参加することができます。人形と一緒にこの展示を体験するかどうかはあなたの自由です。

あなたは自分が好きな人形を選ぶことはできません。スタッフがランダムに人形を決め、あなたに手渡します。それぞれの赤ちゃん人形は5キログラムから6キログラムの重さがあります。上の階では、赤ちゃん人形のおむつ替えが出来、その時に詩が授けられます。パビリオンを出るときに人形は返却してください。

クィアである私は、子どもを持つという発想がありませんでした。「良い」クィアの親でなければとプレッシャーも感じます。私は日本で代理懐胎と卵子提供の議論をもっと促進するために、このビエンナーレの仕事を引き受けました。この参加型のパフォーマンスは歴史的に常に女性が負わされてきたケア労働に関係しています。あなたが赤ちゃん人形を抱きかかえて運ぶという選択自体も、赤ちゃんや子どもへの愛情や熱意だけでなく、子どもを持つ、持たないという、アンビバレントな想いについて触れることもあるでしょう。そしてこうした会話は安全な空間で話されるべきでしょう。

入口近くにある日付を読んでください。私が子どものころ、日本が世界で唯一の原爆の被爆国であることを学びました。でも、同時に日本の超国家主義の過去の詳細に向き合うことも重要だと思っています。かつて私はいくつかの恥ずかしい間違いを犯しました。それを教訓として、自分の子どもたちにはこうした歴史も伝えたいのです。

私はコヨさんには会ったことはありません、でも日本に関するマイナー・キー（短調）を探し始めると、そのリストはあっという間に増えていきました。ここには57の日付しかありませんが、それはもっと増えていくでしょう。

この件に関するお問い合わせ： 国際交流基金 広報部（広報担当：熊倉、福島）Tel: 03-5369-6075 / Fax: 03-5369-6044 E-mail: press@jpf.go.jp

・共同キュレータース・ノート

「草の赤ちゃん、月の赤ちゃん」は、世界の地政学的な秩序が大きな変化を遂げるときに生まれました。ジェノサイドや戦争が明らかに激化し、人々の暮らしに戦争の影が侵食していくリアリティの中に「草の赤ちゃん、月の赤ちゃん」を着床させる挑戦は、荒川ナツシュ医のこれまでの歴史認識や、自らの主体性を常に中心からずらしてきた方法論の見直しへと向かわせる結果になったと思います。設立70周年を記念する日本館での展示は、戦後日本の平和教育を受けて育ち、20代の前半にアメリカに移住、2024年に男性パートナーとの間で双子の親になった荒川ナツシュが、未来を生きる子供の親として、作品の中で自分の態度や感情に深く意識を向け、声を柔らかに、しかし確実にあげながら、隣の韓国館のアーティストやキュレーター、そして多数の表現者たちとともに唱和する場となりました。日本館の展示の中で、観客は赤ちゃん人形のケアラーとしてパフォーマンスに参加しますが、同時に208体の赤ちゃん人形にその振る舞いを見つめられています。赤ちゃん人形のサングラスに映る観客たちは、果たして赤ちゃんたちが安心して暮らせる世界を築き上げているのかを、厳しく問いかけられてもいるのです。



第61回ヴェネチア・ビエンナーレ国際美術展 日本館
代表作家の荒川ナツシュ医と共同キュレータの高橋瑞木、堀川理沙
撮影:丸尾隆一、提供:国際交流基金

・占星術師でライター石井ゆかりが誕生日に合わせて執筆した「オムツの詩」の例

作品の出発点となる1階ピロティエリアで来館者を待つ57体の赤ちゃん人形には、それぞれ異なる20世紀の歴史的な日付が「誕生日」として授けられています。展示の結びとなる出口付近では、来館者は抱いてきた赤ちゃんのおむつを替えるという、具体的なケアを行います。おむつに印刷されたQRコードをスキャンすると、占星術師でライター石井ゆかりが、その赤ちゃんの誕生日に合わせて執筆した「オムツの詩」が贈られます。ここでは、会場に展開されている多様な歴史や出来事にアプローチした詩の中から、その一部をご紹介します。

03/01/1919 - Seoul, Korea - March 1st Movement (ソウル、韓国、三・一運動)

自由と革命の星が南中した時
人々は高く旗を掲げた
あなたは幸福の星を受け継ぐ人
人々が「自分は誰か」を思い出そうとするとき
あなたの誕生日がいつも目印となる

When the lodestars of freedom and revolution
reached their zenith in the sky
the people raised their flags high
the stars of good fortunate shine on you
when someone tries to remember where they came from
your birthday serves as a sign

03/26/1971 - Fukushima, Japan - Fukushima Daiichi Nuclear Power Plant begins commercial operation (福島、日本、福島第一原発営業運転開始)

いちばん強い人の心には
とても臆病なうさぎが住んでいる。
なにがいちばん怖いかを知ることで、
だれよりも強くなれる。
遠くまでゆこうとするときほど、
帰り道のことを大切に考える。
ほんとうの勇者はいつも生き残り、
物語のおわりまで歩くのをやめない。

At the center of the strongest heart
trembles a small, timid rabbit
by facing what scares you most
you can grow strong
the farther away you roam
the more carefully you think about the route home
the true hero keeps on walking
all the way to the story's end

11/20/1989 - United Nations - The Convention on the Rights of the Child adopted (国連、子どもの権利条約)

たくさん子どもたちの骨をあつめて
それを組み立てても 生きかえりはしない
しかしふり向けば
これから生まれてくる子どもたちがいる
星の数ほどのこどもたちの涙をあつめて
その結晶を大人のひとりひとりに配る
かつて子どもだった大人たちに

Surveying a horizon strewn with the bones of children
as countless as stars in the dark night sky
we cannot bring the dead back to life
yet we can piece those tiny bones together
to uplift the children who will be born next
we collect their tears in the hopes
they might crystallize to illuminate the adults
who were once children themselves

Anche raccogliendo le ossa di tanti bambini
E riasssemblandole, questi non torneranno mai in vita.
Eppure, se ci si volta indietro,
Ci sono bambini che stanno per nascere.
Si raccolgono le lacrime di tanti bambini, tanti quanti le stelle,
E come cristalli si distribuiscono, uno ad uno, agli adulti
Che una volta erano bambini.

Surveying a horizon strewn with the bones of children
as countless as stars in the dark night sky
we cannot bring the dead back to life
yet we can piece those tiny bones together
to uplift the children who will be born next
we collect their tears in the hopes
they might crystallize to illuminate the adults
who were once children themselves



たくさん子どもたちの骨をあつめて
それを組み立てても 生きかえりはしない
しかしふり向けば
これから生まれてくる子どもたちがいる
星の数ほどのこどもたちの涙をあつめて
その結晶を大人のひとりひとりに配る
かつて子どもだった大人たちに

11/20/1989 | Nazioni Unite | Adozione della Convenzione sui diritti dell'infanzia

11/20/1989 | United Nations | The Convention on the Rights of the Child adopted

QRコードをスキャンすると表示される、石井ゆかりによる「オムツの詩」の一例。 Courtesy of the artists and the Japan Foundation.